

青年期と成人期における自尊感情と 対人ストレスイベントおよび精神的回復力との関連

下山恵美子 中村恵子 渡部純夫 (東北福祉大学総合福祉学部)

キーワード：自尊感情, 対人ストレスイベント, 精神的回復力, 青年期, 成人期

目的

自尊感情は、人間の根底を支える重要なものである(近藤, 2013)。自尊感情が低い場合、社会生活や対人関係を良好に保つことが困難となる。反対に高い場合は、ストレスや逆境に強い(古荘, 2009)。本研究では、思春期を経て自我同一性の統合期にある青年期後期と社会人として自立している成人期前期の心性の差異に注目し、自尊感情に対する対人ストレスイベントと精神的回復力との関連を探求した。

方法

調査協力者：A大学の通学生 206名と通信教育部生 309名

調査時期：2015年8月8日から10月7日であった。

手続き：授業開始前に一斉法でアンケート調査を実施した。回収は、授業終了後回収箱への自由投函にした。

質問紙の構成：①自尊感情尺度(山本・松井・山成, 1982)

②対人ストレスイベント尺度(橋本, 1997)

③精神的回復力尺度(小塩・中谷・金子・長峰, 2002)

利益相反：相反関係にある企業や団体などの存在はない。

倫理的配慮：本調査は卒業論文として東北福祉大学通信教育部の承認を得て実施した。調査協力者には、研究趣旨とデータは厳重管理の上、個人が特定されないように記号化して処理され、研究以外に用いないことなどについて説明し、自由意志での協力を依頼し、同意を得られた学生を対象にした。

結果

1. 自尊感情とストレスイベントおよび精神的回復力の関連

調査で回答洩れや極端な偏りのない 275 名を青年期後期(18-22歳)の 209名と成人期前期(23-35歳)の 66名とに分類した。各世代を対象に、自尊感情尺度得点を従属変数に、対人ストレスイベント尺度得点と精神的回復力尺度得点を独立変数に重回帰分析を行った。

(1) 青年期後期

重回帰分析の結果、正の有意な関連を示すものは、精神的回復力尺度下位尺度の「肯定的な未来志向」($\beta = .46, p < .001$)と対人ストレスイベント尺度下位尺度の「対人葛藤」

($\beta = .21, p < .001$)であった。負の有意な関連を示すものは、対人ストレスイベント尺度下位尺度の「対人劣等」($\beta = -.45, p < .001$)であった(Fig.1)。

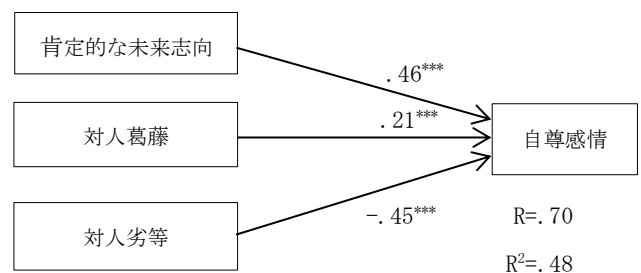


Fig.1 青年期後期の自尊感情に対する重回帰分析結果

(2) 成人期前期

自尊感情に対し、正の有意な関連を示すものは、精神的回復力尺度下位尺度の「肯定的な未来志向」($\beta = .46, p < .001$)のみであった(Fig.2)。

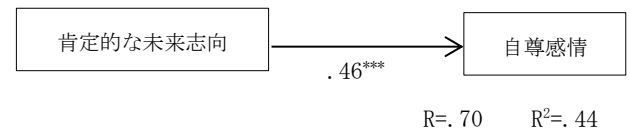


Fig.2 成人期前期の自尊感情に対する重回帰分析結果

考察

青年期後期では、対人葛藤と自尊感情に正の関連が示された。青年期では、チャムグループ形成による同一の価値観を媒介にする特定の仲間との密着した関係から、異なる価値観や異世代の仲間との緩やかな関係を形成するピアグループへの移行を経験する。しかし、密着した関係の継続には、親密であるほど葛藤も伴うはずである。また、異なる価値観や異世代との関係形成にも葛藤が伴うだろう。一方でそれは対人関係形成力を促進し、人格的な成長に貢献する糧となる(保坂, 2000)。関係形成での質的濃密さを経験するゆえの対人葛藤と自尊感情との正の関連であるとも考えられる。

また、青年期後期の大学生の交友は、本人の選択の範囲内にあり、対人劣等は自尊感情と負の関係にあるが、成人期での交友は本人の選択外であることも少なくなく、対人劣等が必ずしも個人の心的特性と結びつかないことも示唆される。